

研 究

「児童養護施設職員が被虐待児との受容的な
関わりを進展させるプロセス」モデルの検証

佐藤 幸子, 藤田 愛, 宇野日菜子

〔論文要旨〕

児童養護施設職員が被虐待児との受容的な関わりを進展させるための要素を明らかにする目的で、児童養護施設に勤務する職員305名を対象に質問紙調査を実施した。その結果、職員の勤務年数と『他職員からの学び』がそれぞれ『子どものサインの読み取り』に影響し、『子どものサインの読み取り』、『他職員からの学び』は『職員の子育て観』へ影響していた。また、『子どものサインの読み取り』、『他職員からの学び』および『職員の子育て観』は子どもへの『受容的な関わり』に影響していた。以上から被虐待児に対する受容的な関わりを進展させるためには、職員の子育て観を高め、子どものサインを読み取ることが重要であることが示唆された。

Key words : 児童養護施設職員, 被虐待児, 受容的な関わり, プロセス, 進展

I. 緒 言

わが国における児童虐待に関する相談件数は増加の傾向が続き、平成23年度の厚生労働省の速報値¹⁾で59,000件を超えている。この中で保護の必要な児童は児童養護施設に入所することが多い。歴史的に見ると児童養護施設は孤児などの保護施設として始まり、1990年代後半から急速に被虐待児の保護の割合が増加している²⁾。これらの背景から奥山は、当初は物理的な生活を提供することが施設の第一義的な目的であったが、近年は被虐待児の治療的生活の場である必要性が高まってきていることを強調している³⁾。虐待の子どもへの身体的心理的影響については多くの報告があり^{4~10)}、また、長期的な影響も指摘されている¹¹⁾。特に児童福祉施設に保護される被虐待児は、虐待が深刻なケースが多い。そのため入所児童は虐待の心理的影響も大きいと考えられる^{12,13)}。杉山はその回復のため

に治療的な環境が不可欠であると言っている¹²⁾。生活場面全体を心理面の治療的環境として作用させるためには、児童福祉施設の職員が子どもと良好な関わりを進展させることが重要である。しかし、被虐待児の心理的被害の中核は愛着形成の失敗に由来するため、その病理は新たな養育者となる児童養護施設職員との関係に展開され、職員はその関係性に巻き込まれ疲弊も大きい¹⁴⁾。そのため職員が良好な関わりを進展させるための支援や、その関わりの進展を評価し改善を重ねていくことが重要である。

佐藤らが先行研究において「養護施設職員が被虐待児との関わりを進展させるプロセス」を質的に検討したところ、職員が被虐待児との関わりを進展させるためには「関わりを進展させる原動力」を調整することが必要であることが示された¹⁵⁾。この「関わりを進展させる原動力」には、子どもの行動の解釈や職員の職業観・子育て観、他の職員からの影響（学び）などに

Examining the Model of Processes Used the Staff of Children Protection Institutions to
Develop Receptive Relationships with Abused Children

Yukiko SATO, Megumi FUJITA, Hinako UNO
山形大学医学部看護学科（研究職）

別刷請求先：佐藤幸子 山形大学医学部看護学科 〒990-9585 山形県山形市飯田西2-2-2
Tel/Fax : 023-628-5447

[2569]

受付 13.10.10

採用 14. 4.26

関連する概念が含まれており、子どもの行動の解釈を進めたり、長期的な観点で子どもをどう育てるのかを考えたり、あるいは職員間の情報交換を進めることが職員の関わりへの自信を高め、受容的な関わりを推進することが示唆された。しかし、この研究は1施設の面接による質的研究であり、一般化には限界があった。

そこで、質的研究で明らかになったプロセスをもとに職員の性別や年齢などの基本的な属性も加味し、仮説モデルを作成した(図1)。そして、概念の具体例をもとに質問紙を作成し、仮説モデルの検証を行いたいと考えた。この仮説モデルが実証されれば、職員の良い関わりを進展させるために必要な要素が明確になると考えられる。

本研究の目的は、「児童養護施設職員が被虐待児との受容的な関わりを進展させるプロセス」の仮説モデルの検証を行い、職員の受容的な関わりを進展させるために必要な要素を明らかにすることである。

用語の操作的定義

本研究の児童養護施設職員と被虐待児との関わりとは、「児童養護施設の職員が被虐待児に対して行う生活支援上の態度や行動」とする。

Ⅱ. 研究方法

1. 調査対象

対象は全国579施設ある児童養護施設から無作為に抽出した100施設のうち、施設長の承諾の得られた23施設に勤務する職員471名中305名であった。回収率は72.9%であり、有効回答率は99.3%であった。

2. 調査期間

調査期間は2010年11月～2011年1月であった。

3. 調査方法

調査方法は自記式質問紙法で、施設長より依頼書と

ともに調査表を封筒に入れて配布・回収してもらった。

4. 質問項目

i) 対象者の基本的属性

対象者の年齢、勤務年数、性別、配偶者の有無、子どもの有無、職種について調査した。

ii) 「児童養護施設職員が被虐待児との関わりを進展させるプロセス」に関する質問項目(以下、関わり質問紙)

「関わり質問紙」は、先行研究¹⁵⁾で明らかにした「養護施設職員が被虐待児との関わりを進展させるプロセス」の構成概念の8カテゴリーの具体例をもとに独自に作成したもので、42項目からなる。回答は「5. 全く当てはまる」～「1. 全く当てはまらない」の5段階の順序尺度で答えるものとした。

5. 分析方法

分析方法はSPSS18.0を用いて単純集計および「関わり質問紙」の因子分析を行った(主因子法、バリマックス回転)。モデルの検証にはAMOS18を用いてパス解析を行った。

6. 倫理的配慮

本研究は山形大学倫理委員会で審査を受け承認を得た。事前に児童養護施設の施設長より承諾を得て、対象者には書面で研究の主旨、自由意思による参加、不利益からの保護、プライバシーの保護、結果の公表等を説明し、同意が得られた場合に回答してもらった。

Ⅲ. 結果

1. 対象者の属性

対象者の平均年齢は34.0±10.6歳であり、施設における勤務年数の中央値は4年であり最小値1年、最大値は38年であった。男性は102名(33.4%)、女性は203名(66.6%)であった。配偶者ありと答えたものが113名(37.0%)、子どもありと答えたものは95名(31.1%)であった。職種は、保育士が123名(40.3%)であり、生活指導員は132名(43.3%)、心理士は13名(4.3%)であった。

2. 「関わり質問紙」の分析

「関わり質問紙」について主因子法にて因子分析を行った後、バリマックス回転を行った(表)。その結果8因子が抽出された(33項目)。8因子を構成する

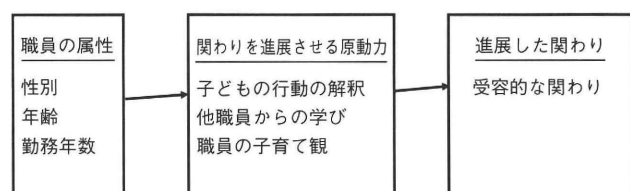


図1 「児童養護施設職員が被虐待児との受容的な関わりを進展させるプロセス」の仮説モデル

表 児童養護施設職員が被虐待児との受容的な関わりを進展させるプロセスに関する質問項目の因子分析

因子	因子名	質問項目	因子負荷量	累積寄与率	α 係数
I	受容的な関わり	1 対 1 の関係性を作るようにしている	.699	7.56	0.81
		子どもが甘えてきたら受け入れる	.698		
		子どもが大事にされていると感じられるように関わっている	.611		
		自分が子どもを大事に思っていると言葉に出して伝えている	.537		
		笑顔など雰囲気づくりに気をつけている	.519		
		片付けなど一緒に行動しながら方法を教えている	.481		
II	職員の子育て観	子どもに生活習慣を身につけさせたいと思う	.739	15.11	0.82
		子どもに社会のルールを教えなければと思う	.715		
		子どもに命の大切さを伝えなければと思う	.690		
		伝統行事などを子どもに伝えていかなければと思う	.661		
		正しいことや悪いことは言葉に出して伝えている	.510		
		子どもに普通の生活体験をさせたいと考えている	.414		
III	関わり方の困難感	子どもに応えてもらえないと思うことが多い	.657	21.76	0.74
		入所中の子どもの行動はそう簡単には変わらないと思う	.580		
		自分が受け入れることのできない子どもの言動が多い	.558		
		入所中の子どもは学ぼうという意欲は少ないと思う	.517		
		他の子どもと比較することが多い	.498		
		子どもは自分の生活習慣との違いが大きい	.480		
		子どもの行動が理解できないことが多い	.464		
IV	子どものサインの読み取り	子どもが何を望んでいるのかを行動から読み取っている	.767	26.05	0.75
		子どもが何を望んでいるのかを発言から読み取っている	.678		
		子どもの小さな変化を見逃さないようにしている	.431		
V	関わりへのゆとり	子どもとの関わりにゆとりがある	.741	30.14	0.60
		子どもとの関わりに負担は感じない	.579		
		子どもの気持ちを理解できると思う	.483		
VI	関わり方の限界	子どもの言いたいことに気付かないことがある	.831	33.60	0.62
		子どもの要求に応えてあげられないことが多い	.492		
		子どもの気持ちをくみ取ることは難しい	.352		
VII	他職員からの学び	他の職員の助言をよく受ける	.766	36.93	0.65
		他の職員の子どもへの関わり方が参考になる	.487		
		心理士の助言をよく受ける	.436		
VIII	気持ちよく過ごしたい	子どもも自分もお互いが負担にならないように生活したい	.641	42.60	0.69
		子どもも自分もお互いに気持ちよく生活したいと思う	.609		

主因子法（バリマックス回転）

33項目以外の9項目は、因子負荷量が低く除外された。33項目全体の信頼係数 α は0.81であった。以下「」は質問項目を、『』は因子名を示す。

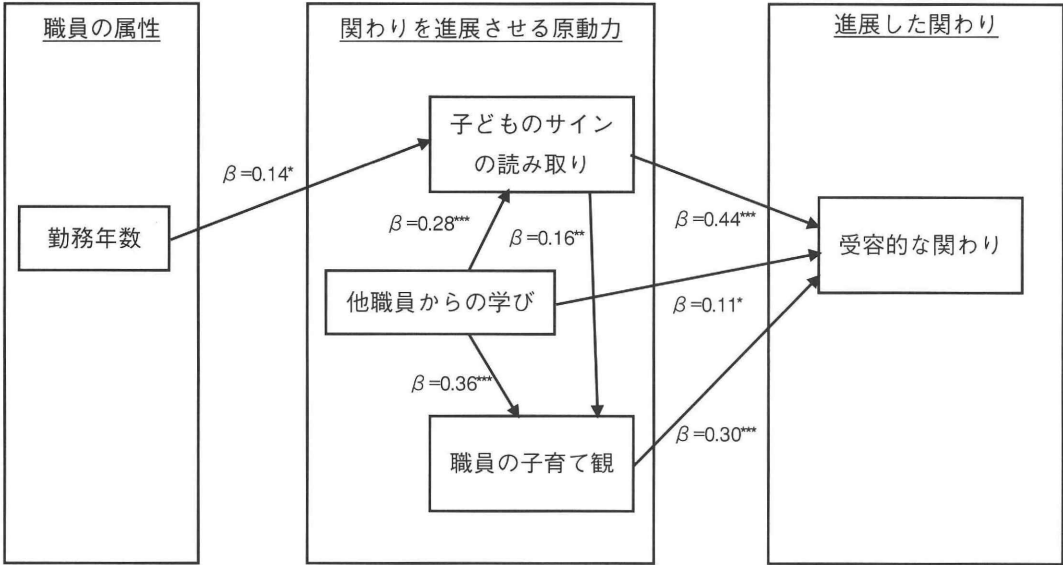
第I因子は、「1対1の関係性を作るようにしている」、「子どもが甘えてきたら受け入れる」、「子どもが大事にされていると感じられるように関わっている」等の6項目からなり、職員が子どもに対し受容的に関わっていることを示していることから『受容的な関わり』と命名した。6項目の信頼係数 α は0.81であった。

第II因子は、「子どもに生活習慣を身につけさせたいと思う」、「子どもに社会のルールを教えなければと思う」、「子どもに命の大切さを伝えなければと思う」

等の6項目からなり、子どもをどのように育てるべきかが示されていることから『職員の子育て観』と命名した。6項目の信頼係数 α は0.82であった。

第III因子は、「子どもに応えてもらえないと思うことが多い」、「入所中の子どもの行動はそう簡単には変わらないと思う」、「自分が受け入れることのできない子どもの言動が多い」等の7項目からなり、職員の子どもへの関わりに対するとまどいが示されており、『関わり方の困難感』と命名した。7項目の信頼係数 α は0.74であった。

第IV因子は、「子どもが何を望んでいるのかを行動から読み取っている」、「子どもが何を望んでいるのか



カイ二乗値：0.099，有意確率：0.75
n=305，CFI=1.000，NFI=1.000，RMSEA=0.000，AIC=38.099
β：パス係数， ：変数，→：有意なパス係数
*** $p<0.001$ ，** $p<0.01$ ，* $p<0.05$

図2 「児童養護施設職員が被虐待児との受容的な関わりを進展させるプロセス」のモデルの検証（最終モデル）

を発言から読み取っている」，「子どもの小さな変化を見逃さないようにしている」の3項目からなり，職員が子どものちょっとした行動や発言から，今子どもが何を望んでいるのかを読み取って対応しようとしていることが示されており，『子どものサインの読み取り』と命名した。3項目の信頼係数 α は0.75であった。

第Ⅴ因子は，「子どもとの関わりにゆとりがある」，「子どもとの関わりに負担は感じない」，「子どもの気持ちを理解できると思う」の3項目からなり，子どもとの関わりが気持ちの負担にならずゆとりが出てくることが示されており，『関わりへのゆとり』と命名した。3項目の信頼係数 α は0.60であった。

第Ⅵ因子は，「子どもの言いたいことに気付かないことがある」，「子どもの要求に応じてあげられないことが多い」，「子どもの気持ちをくみ取ることは難しい」の3項目からなり，子どもへの関わりに困難や限界を感じていることが示されており，『関わりの限界』と命名した。3項目の信頼係数 α は0.62であった。

第Ⅶ因子は，「他の職員の助言をよく受ける」，「他の職員の子どもへの関わり方が参考になる」，「心理士の助言をよく受ける」の3項目からなり，子どもへの関わりや自分の考えに他の職員の言動から学んでいることが示されており，『他職員からの学び』と命名した。

3項目の信頼係数 α は0.65であった。
第Ⅷ因子は，「子どもも自分もお互いが負担にならないように生活したい」，「子どもも自分もお互いに気持ちよく生活したいと思う」の2項目からなり，子どもと職員のお互いが気持ちよく生活したいと思うことが示されており，『気持ちよく過ごしたい』と命名した。2項目の信頼係数 α は0.69であった。

3. 仮説モデルの検証（図2）

共分散構造分析により仮説モデルの検証を行った。図2に示した仮説モデルをもとに妥当なパス図を作成した。その結果，図2に示したとおり職員の勤務年数から『子どものサインの読み取り』へのパス係数が有意であり（ $\beta=0.14$ ， $p<0.05$ ），『他職員からの学び』から『子どものサインの読み取り』（ $\beta=0.28$ ， $p<0.001$ ）および『職員の子育て観』（ $\beta=0.36$ ， $p<0.001$ ）へのパス係数が有意であった。また，『子どものサインの読み取り』から『職員の子育て観』へのパス係数が有意であった（ $\beta=0.16$ ， $p<0.01$ ）。さらに，『子どものサインの読み取り』（ $\beta=0.44$ ， $p<0.001$ ），『他職員からの学び』（ $\beta=0.11$ ， $p<0.05$ ），『職員の子育て観』（ $\beta=0.30$ ， $p<0.001$ ）から『受容的な関わり』へのパス係数が有意であった。カイ二乗値は0.099

で有意確率0.75であり, CFI = 1.000, NFI = 1.000, RMSEA = 0.000, AIC = 38.099とパス図の当てはまりは良好であった。すなわち, 図2が最終モデルとなった。

IV. 考 察

先行研究¹⁵⁾で明らかにした「養護施設職員が被虐待児との関わりを進展させるプロセス」は, 修正版グラウンデッド・セオリーを用いた質的研究であった。木下はグラウンデッド・セオリーによる理論の生成に関する自然科学的な検証偏重に対しては批判的であり, その理論から仮説を導き検証を試みる研究活動の限界を指摘している¹⁶⁾。しかし, マクロな対象を扱う社会学では理論に結びつける原理がないため否定的に考えられるが, 心理学や医学領域ではミクロな相互行為を扱うことが多く, その場合は理論生成や仮説形成が可能と考え, 今回はあえて検証の研究を試みた。このプロセスが検証されれば, 今後困難感が強いと考えられている被虐待児に対する関わりへの支援を推進することができると考えられ, その必要性が高いと考えたからである。結果的にパス図の当てはまり良好であったことから, このような試みは妥当性のあるものと考えている。以下項目に沿って考察する。

1. 「関わり質問紙」の因子分析

「関わり質問紙」の因子分析により8因子が抽出された。これらの因子は先行研究¹⁵⁾において抽出されたサブカテゴリーまたは概念のいずれかに含まれていた。質的検討ではサブカテゴリーと概念のように抽象度が異なっていたが, 量的検証の段階では概念の抽象度に関係なく, プロセスの核心的な概念として一般化されて示されたと考えられる。

2. 仮説モデルの検証

因子分析により得られた因子を仮説モデルに当てはめパス解析で検証したところ, 関わりを進展させる原動力は互いに影響し合いながら, 受容的な関わりに影響するというプロセスがほぼ検証された。すなわち, 『子どものサインの読み取り』, 『職員の子育て観』, 『他職員からの学び』が相互に関連しながら『受容的な関わり』を促進することが検証された。従来, 母子相互作用において情緒応答性は重要な概念であり^{17, 18)}, 乳児の情緒表現への気づきと共感的な反応および母親の

情緒表現の提供が, 子どもの情緒的発達に重要であることが指摘されている¹⁹⁾。河野は母子サイクルモデルから, 子どもの反応や子どもの特徴をつかみ欲求の読み取りができるようになると母親の自信やゆとりが生まれ意識も高まることを報告している¹⁹⁾。また, 前原も産褥期の母親役割獲得に有効な母子相互作用に焦点を当てた看護援助の一つとして, わが子の合図を読み取る敏感性を高めるとしている²⁰⁾。本研究における『子どものサインの読み取り』は新生児や乳児に限らず, 被虐待児の養育においても, 「子どもが何を望んでいるのか」や「小さな変化を見逃さない」ことが, 重要な項目であることが示された。特に被虐待児ではその心理的な影響から, 表現や対処行動が上手にできず, 情緒不安定な言動や問題行動として表現してしまいがちであることから, 子どもが本当に求めていることを読み取ることが重要になってくると考えられる。

『職員の子育て観』については, 被虐待児に対して何を教えなければならないのかという観点に立った項目から構成されていた。児童養護施設への入所は18歳までであるが, 退所後の生活等長期的展望を考慮した, 施設職員の子どもに対する教育的・倫理的考え方が示されるものである。『職員の子育て観』も被虐待児との関わりを進展させる際に欠くことのできない重要な要素であると考えられる。

『他職員からの学び』に関しては, 主に他のスタッフからの助言だけでなく, 実際の関わりを一緒に体験することにより, 子どもに対する理解や対応技術が高められるものと考えられる。『他職員からの学び』が『子どものサインの読み取り』に関与していることから, 子どもとの関わりの経験や振り返りが『子どものサインの読み取り』の力を高めるものとする。竹内らは看護師における職業観について職場経験を重ねることで職場での存在価値が高まる一方, アイデンティティの確立には教育が必要であると述べている²¹⁾。本研究の対象は児童養護施設の職員ではあるが, 同様に被虐待児に対する研修の機会を設け, 経験のある職員からの助言を受けることや事例検討会等, 日ごろの活動に関する振り返りが重要である。今後は効果的な事例検討会や研修等に関する支援について, 実証的に検討していくことが必要である。

V. 結 論

本研究により『子どものサインの読み取り』、『他職員からの学び』、『職員の子育て観』が相互に影響しながら『受容的な関わり』を促進することが検証された。『子どものサインの読み取り』から『職員の子育て観』への影響や、『他職員からの学び』から『子どものサインの読み取り』、『職員の子育て観』への影響を考え、関わりを進展させる原動力となるものを関連させて高めていくような研修を実施していくことが、被虐待児との関係性を進展させ、子どもの心理的な発達の環境を高めるために重要であることが示唆された。

本研究にご協力いただきました皆様に心より感謝申し上げます。

利益相反に関する開示事項はありません。

文 献

- 厚生労働省. 児童相談所での児童虐待相談対応件数. <http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000002fxos-att/2r9852000002fy23.pdf> (2013.03.19)
- 加賀美尤祥, 西澤 哲. わが国の社会的養護の現状と課題. *トラウマティック・ストレス* 2011;9:5-14.
- 奥山眞紀子. 日本の社会的養護制度の過去, 現在, 未来. *トラウマティック・ストレス* 2011;9:15-24.
- Combs-Orme T, Cain DS. Predictors of mothers' use of spanking with their infants. *Child Abuse & Neglect* 2008;32:649-657.
- 石曉 玲. 児童養護施設における子どもの情緒的・行動的問題アセスメント. *臨床教育心理学研究* 2006;32:1-8.
- 伊東ゆたか, 犬塚峰子, 野津いなみ, 他. 児童養護施設で生活する被虐待児に関する研究(2) ケア・対応の現状と課題について. *子どもの虐待とネグレクト* 2003;5:367-379.
- 丹羽健太郎, 宮本信也. 児童養護施設に在所する児童の認知特徴 WISC-Ⅲを用いた分析. *小児の精神と神経* 2009;49:307-316.
- 大原天青, 楡木満生. 児童自立支援施設入所児童の行動特徴と被虐待経験の関係. *発達心理学研究* 2008;19:353-363.
- Schatz JN, Smith LE, Borkowski JG, et al. Mal-treatment risk, self-regulation, and maladjustment in at-risk children. *Child Abuse & Neglect* 2008;32:972-982.
- 吉田敏子. 児童養護施設入所児の身長発育に関する研究～心理的, 社会的背景の身長発育に与える影響～. *小児保健研究* 2011;70:523-528.
- Berlin LJ, Appleyard K, Dodge KA. Intergenerational Continuity in Child Maltreatment: Mediating Mechanisms and Implications for Prevention. *Child Development* 2011;82:162-176.
- 杉山登志郎. 発達障害とアタッチメント障害. *トラウマティック・ストレス* 2011;9:25-31.
- 筒井孝子. 日本の社会的養護施設入所児童における被虐待経験の実態. *厚生学の指標* 2011;58:26-33.
- 加藤尚子. 虐待を受けた子どもの支援者への心理コンサルテーションの機能とプロセスに関する研究. *社会福祉学* 2009;50:5-15.
- 佐藤幸子, 佐藤志保, 山口咲奈枝, 他. 養護施設職員が被虐待児とのかかわりを進展させるプロセス. *日本看護研究学会雑誌* 2011;34:105-114.
- 木下康仁. *グラウンデッド・セオリー・アプローチ*. 東京: 弘文堂, 1999.
- Sameroff AJ, Emde RN. 小此木啓吾監修. 早期関係性障害. 東京: 岩崎学術出版, 2003.
- Brazelton TB, Nugent JK. 穂山富太郎監訳. *ブラゼルトン新生児行動評価原著第3版*. 東京: 医歯薬出版株式会社, 1998.
- 河野洋子. 産褥期の母子相互案計と看護の構造(第2報) —育児に関する看護過程の分析—. *母性衛生* 2001;42:418-426.
- 前原邦江. 産褥期の母親役割獲得過程 —母子相互作用の経験を通して母親役割の自信を獲得していくプロセス—. *日本母性看護学会誌* 2005;5:31-37.
- 竹内久枝, 馬淵弥生. 看護師における職業的アイデンティティの現状調査 —アサーティブコミュニケーションとの関連から検証—. *磐田市立総合病院誌* 2010;11:54-58.

[Summary]

This study examined the model of “receptive processes used by the staff of children protection institutions to develop relationships with abused children”. A sample of 305 staff members of children protection institutions

completed original questionnaires that were based on our qualitative research. Permission was obtained from the ethical examination committee of the facility to which the researchers are affiliated. We conducted a path analysis, using the factors extracted from factor analysis for the original questionnaires. Results revealed that the number of years of employment of a staff member and "learning from other staff members" impacted the staff member's "interpretation of a child's behavior". Additionally, the staff member's "interpretation of a child's behavior" and "learning from other staff members" were shown to impact the staff member's "view on child-rear-

ing". Furthermore, the staff member's "interpretation of a child's behavior", "view of child-rearing" and "learning from other staff members" were shown to impact "the receptive relationships". Fit indexes were considered sufficient to support this model. We concluded that this model of processes had sufficient validity.

[Key words]

staff of children protection institution, abused children, receptive relationships, process, development